

附録 序

是先師以寛政丁巳之春、所賜余之手書、事狀詳悉、蓋儼然一編米澤紀行矣、書到之初、柳川致仕大夫今村子共適訪余廬、余出示之、子共觀而大喜、感称不已、遂請數日之借袖歸、子共好善、蓋寫而傳之于人、厥後寫々相承、數年間、我四隣侯國之讀書好道者、往々皆傳之云、先師没今十有七年、而此書則二十有一年、嗚乎舊矣、先師賜書余家甚多、而此牘尤深感入、謹裝以貽之于子孫。

文化十四年冬十一月

樺公禮 拜

附録 序【書き下し文】

是れ先師、寛政丁巳の春を以て、余に賜はる所の手書なり。事狀詳悉。蓋し儼然として一編の米沢紀行なり。書到るの初め、柳川致仕大夫今村子共、適たま余の廬を訪ふ。余いでこれを示す。子共觀て大ひに喜び、感称して已まず。遂に數日の借袖を請ひて歸る。子共善を好む。蓋し写しこれを人に傳へん。厥の後写々相承はること數年間、我四隣侯國の書を読み、道を好む者は、往々皆これを傳ふること云ふ。先師没し去りて、今十有七年。而して此書則ち二十有一年。嗚乎、旧なるかな。先師書を余の家に賜はること甚だ多し。而して此牘尤も深く人を感ず。謹装して以て子孫に貽す。

文化十四年冬十一月 樺公禮拜

附録のはじめに

これは、今は亡き細井平洲先生が、寛政九年（一七九七年・平洲先生七十歳）の春に、わたしに送っていただいた手紙である。事実や状況がことごとくくわしく書かれていて、思うにこれは、おごそかな一編の米沢紀行である。この手紙が届いたとき、梁川藩を隠居した今村子共が、ちょうどわが家を訪ねて来たところであった。そこでわたしは、この手紙を見せた。彼はこの手紙を見てたいへん喜び、感動して称賛することをやめなかった。ついに数日の借用を願い、ふところに入れて持って帰っていった。子共は善なることを好む。たぶん書き写して、これを人に伝えるのであろう。その後、手紙を書き写したいという依頼を受けること数年間、わたしの国の周囲の国で、書を読み、道を好む者は皆これを伝えていっ

たという。

平洲先生が亡くなられて今年で十七年がたつ。そしてこの手紙が届いてから二十一年になる。ああ、昔になってしまったことよ。

平洲先生は私の家に手紙を下さることも多かった。しかしこの手紙こそ、最も深く平洲先生の人柄を感じさせるものである。謹んで表装をしてこれを子孫に残すものである。

文化十四年（一八一七年）冬十一月

かばしまこうれい せいぎ せきりょう
樺島公禮（世儀・石梁） 拜す

附録

新年恭喜猶甚寒候得共、御揃 弥 御安福ニ

ことさら せいじよがいしょう おんこもこもめでたくごげいようなさるべく
殊更今春ハ令女孩笑、御交々目出度御迎陽可被成

と、重畳目出度奉 存 候。

しょうかんちゅう つつがなくかねんいたし ごあんいくださるべく
小館中老少無恙致加年候、御安意可被下候。

ひとつ きよねんおいおいごししよ ふしぶしとどこおりなくはいけんいたしおお
一、去年追々御詩書、節々無 滞 致拜見大キル

なぐさみとおくねんじもうし きこう ごぞうりゆう のよし
慰 遠念 申候。貴校も追々御造立落成之由、

けんろう そうら えども さてきてきようえつのおんことごほんもうの
賢勞二ハ候得共、扱々恭悦之御事御本望之

おもむきえんさついたし て ぐろうにおいても たいけいこれにすぎず
趣 致遠察候而、於愚老も大慶不過之候。

附録

新年つつしんでお喜び申しあげます。まだ、ひどく寒いですが、皆様お揃いで、安らかに幸せに、とりわけこの春は、お子さんの笑いもあり、それぞれ、おめでたく新年をお迎えることを、このうえもなくおめでたく存じ上げます。

当方も、みな、なにごともなくひとつ年をかさねました。御安心ください。

一、去年、次々といいただきました詩は、その折おりに拝見いたしました。とてもいい、慰みになり、遠く離れたところにいるあなたに思いを寄せました。藩校も再建されたとのこと、御苦勞なことではありましたが、なんとまあ、うれしいことで、望みを達成されたお喜びを、お察しいたします。わたしにとりまして、こんなにうれしいことはありません。

きんねんれつこく　こうしやとりた　あいきき　そのうちなかば
近年列国追々校舎取立テも相聞候。其内半ハ
ぐろうつねづねまい　しよこうけぞうりゆうのこう　よぶんいたし
愚老常々参り候諸侯家造立之功も追々致与聞候
て　ほんもうのこと　ぞんじそろう
而、本望之事ニ存候。

きほう　なおさらそつか　おとりたて　こと　しんそこきえついたし
貴邦ハ猶更足下御取立の事、心底致喜悦候。
このうえきんがくのしゅほうとうごゆだんなくおころがけなされそろう

よう　ぞんじそろう　とかくきゆう　まいらずこと　そろうあいだ
様ニと存候。兎角急ニハ不参事ニ候間、

の　もつばら　おんぎ　なされたきおんこと　ぞんじ
永久之所ヲ專ニ御議シ被成度御事ニ存候。

近年、諸国で、つぎつぎと藩校が設立されるとききます。そのうちの半分ほどは、わたくしが講義にうかがっております諸家の設立による功績と聞いておまして、望みを達成して満足しています。

あなたの久留米藩は、そのうえに、あなたを教授にされたとのこと、心の底からうれしく思います。このうえは、学びに努め励む方法などの注意をおこたることなく心がけられることです。とにかく、急にできることではありませんので、将来を見すえた議論をしていくようにしたいものです。

一、愚老ぐろう去八月廿五日、東都致發足候。ほっそくいたし此行ハ偏このゆき

二米澤今候、老侯への孝心より事起り、久々御面きんこう

談もうさずも不申、老侯常々遥はるかなおもいやまずにそうろうにつき念不已候付、今侯其

所はなはだわずらうおもいこれありヲ甚て勞きつ念有之候而、急度市谷へ願達有ねがいたつし

之候付、市谷ニても甚はなはだこうしん孝心ヲ感心被致候故ニ、かんしんいたされそうろうゆえ

乍大儀下向候様ニ被申渡、日限之儀も彼地の用たいぎながらけこうそうろうよう

事相濟候迄ハ心次第二逗留致候様尔と、細々じあいすみ

被申含、もうしふくめられ

一、わたしは、昨年の八月二十五日に江戸を旅立ちました。

この旅立ちは、まったく、米沢藩主上杉治広公の、父親鷹山公に対する親孝行から生じたことです。長い間、鷹山公がわたくしと会うことがなくて、いつもいつも会いたいと思っておられることを、治広公が気にかけておられて、このたび、尾張藩に、わたくしの米沢招待を願い出られました。

尾張候におきましても、この親孝行に感心されて、それをはなえるために、わたしに、御苦労なことではあるが、米沢へ出かけるようにと申し渡されました。期間も、米沢での要件が終わるまで、こころゆくまで滞在してきてくださいと、こまごまはなしがありました。

がんらい

たいめん

た

たきほんしん

元来生涯二今一度老侯へ對面い多し度本心、

まごころのもとにあいかない

のあい

下 惴尔相叶候付、七十老ヲ忘レ、百里之旅行

ぞんじたちそうろうこと

そうろう

かいほうのため

も存立候事二候。途中介抱之為ニ、服部吉弥

そえられ

とりはから

もうす

ヲ被添、日々の取計ひハ内田吉左衛門と申、

かつてがたのろうり

こうりよ

こと

つかさどり

ぎようふどもまで

勝手方之老吏壺人、行旅の事ヲ司里、轡夫共迄、

きんしんの

えら

に

謹慎之者ヲ撰ミ尔て、愚老ハ門生上田雄次郎、菱刈

どうどう

ずいしんのけらい

卯三郎兩人、介抱二同道、隨身之家来ハ那須良助、

やりもちぞうりとり

そのほか

じにんぞうにん

いず

かのいえのの

鍵持草履取兩人、其餘の持人雜人、何レも彼家之

きんちよくものばかり

つけられそうろうにつき

謹直者計ヲ被附候付、

もともと、生涯に今一度鷹山公にお会いしたいというの

が本心でしたのですが、その思いにかなひ、七十歳の老人

であることを忘れて、百里もへだたった米沢への旅行を思

い立ちました。旅中の世話人として、服部吉弥がつけられ、

日々の庶務は、内田吉左衛門という財政担当の老役人一人

がつけられまして、旅程のことを担当し、駕籠かきにいた

るまで、慎み深い者を選んでくださいました。わたしは、

嚶鳴館塾生の上田雄次郎（伊予西条藩士）、菱刈卯三郎（肥

後人吉藩士）の二人を、世話人として同行させました。こ

れに付き添う家来は、那須良助で、槍持ち、草履取りの二

人、そのほかの下働きの者、全員、上杉家のつつしみ深く、

正直でまじめな者だけをつけてくださいましたので、

さてさて

にぎにぎしく これもとよりどうのたい ぎんえいかししょう

扱々道中も賑々敷、自基之堂之態、吟咏歌笑、

たのしきこと

ごぎそうろう

のうち

とうとじんに

樂敷事二御座候。両生之内も、上田ハ東都人尔て、

あひ

おど

てひびのつかれ

山野之風景二逢候へハ、躍り候而日々勞ヲ忘レ申

そっかれきゆう

おうわき

候。日光之左右ハ元来足下歴遊之地、所々尔て御噂

もうし このところどうけいたさずこと

うら

ヲ申、此所同携不致事ヲ恨ミ申候。

とねがわ

えきえきに

げきりよ

おうおうこころざしこれある

刀称川以東駅々尔ても、逆旅主人往々 志 有之

もの

て

もうしとな

あい

者も御座候而、米澤聖君様の御師匠様と申唱へ、逢

まかりいで

よい まい

二罷出し者も多く、霄ニ参り、又朝ニ夜ヲ込メテ、

そうろうもの

これあり

途中迄礼服にて送り 候 者も有之候。

さてさて、道中にはにぎやかで、これは、もともと大勢の

ことで、詩を吟じ、歌をうたい、笑い合い、楽しいことでした。

上田と菱刈の二人うち、上田は、江戸生まれの江戸育ちなので、山や野原の風景に出会々と、躍りあがってよろこび、日々の疲れを忘れております。日光の周辺は、もともと、あなたが巡り歩かれたところで、ところどころであなただのことを噂しました。同行できなかったことを、残念に思いました。

利根川から東の宿場、宿場においても、旅館の主人に、しばしばこころざしをいただく人がいて、「米沢聖君様（鷹山公）のお師匠様がおこしになった」といって、会いにくるものも多くいました。夕方やってきたり、また、朝に夜にとやってきました。途中まで礼服で見送ってくれた人もいました。

これによつて
依之米澤侯之徳、隣国ニ布キ申候様子共
かんしんいたし
致感心候。

十一日振之旅行、九月五日ニ南境板谷関ニ至
ぶりの
みなみきかいいたやせき

り候所、國校之督学 提学近來督学ニ被改候 神
こつこうのとくがく ていがくきんらいとくがく あらためられ じん

保行簡前日より罷出、以命勞し申候。其餘
ぼぎようかん まかりいで めいをもつてわずらわ そのほかの

吏人も多く差出し被置候。
りにん おかれ

翌六日二嶺ヲ下り、府城より三里大沢と申驛ニ至
みね おおさわ えき

り候所、老侯親敷郊迎之沙汰相聞候付、急ギ候而八
したしくこうげいの さたあいきこえ て

ツ過二羽黒堂と申地ニ至り申候。此所ハ南郊一
すぎ もうすち このところは なんこう

里五六丁も府城ヲ距り申所ニ候。
さ もうすところ

このことによつて、米沢侯（鷹山公）の徳が、隣国にまで
しれわたっていることに感心しました。

旅も十一日目の九月五日に（米沢藩領）南境の板谷関に
着きましたところ、藩校の督学―提学を近ごろ督学と改め
られた―神保行簡が、命令を受けて前日よりでかけてきて
おり、世話をしてくれました。そのほかの役人も多く配置
されておりました。

翌日の六日に峰を下り、お城 より三里（およそ十二キ
ロ）の大沢という宿につきましたところ、鷹山公（老侯）
がみずから出迎えにきておられると聞きましたので、いそ
ぎまして、ハツ過ぎ（午後二時すぎ）に羽黒堂というところ
に着きました。ここは。お城から一里五六丁（およそ六
キロ）ほど南のところです。

最早侯の儀衛遙二相見候付、五六丁轎ヲ下り歩

ミ申候所、普門院と申寺の門前ニ、兩傍ニ雲從

俯伏、候は路の中心に立て被相待候。

進而拝し申候所、愚情ハ地ニ手志て拜度存

候得共、侯の態度左候ハ、地ニ手して答拜

可有之様子故ニ、無是非、足跗ニ手志して拝し申

候。

もうすでに、鷹山公の行列が遠くに見えました。五六丁

(およそ六百メートル) 手前のところで駕籠をおりて、歩

んで行きましたところ、普門院という寺の門前の両側に、

家来が雲のごとくつきしたがって、うつむいて伏しており、

鷹山公は道のまんなか立って待っておられました。

進み寄ってお辞儀をしました。わたし自身の思いは、地面に

手をついてお辞儀をしたかったのですが、そうすると、鷹山

公のようすからみて、同じように地面に手をついて返礼され

るようでしたので、やむをえず、足のところまで手をさげて

お辞儀しました。

まずなんのことは まづなんのことは ろういまんがん
先何之言もなく、老涙満顔二御座候。候も一向 いっこう
に なみだまんめん ごあんたい ばかりに
無言尔て涙満面、先生御安泰と計尔て、御案内
もうすべし はいられ まで あしゆびあお
可申とて、寺門二被入候。外門より中門迄、足指仰
もうし ばかり れんぼ
キ申候。三丁計の坂二御座候。聯歩ニシテ進ミ
なかなか まえゆき これなく つえ すすめられ そうら
申候。中々一步も前行ハ無之候。杖ヲ被進メ候
えども じし つえつかずそうろうあいだ もし いたすべき
得共、辞志て不杖候間、若やつまつきも可致
や こころづかい あいみ ひか ばかり ひけんし
哉との心遣と相見え、手ヲ引又計ニ比肩志て
すすまれ
被進候。

どう あが せつ もうされ かい どういた
堂二上り候節、御案内と被申候て階ヲ上り、堂板
ざ ふふく またれ
二座し、俯伏して被待候。

なんのことはもです、ただ涙がながれました。鷹山公も
まったく無言で、顔中涙。「先生、ようこそ御無事で。御案
内いたします」といわれて、お寺の外門に入られました。外
門より中門まで、ずっと足先を手で指し示して案内されまし
た。三丁（およそ三百メートル）ばかりの坂道でした。連れ
添って歩んでいかれました。一步も前に出られることなく、
よりそって歩かれました。杖をすすめられましたが、辞退し
ましたので、もしや、つまづかれてもいけないとの心遣いか
ら、手を引かんばかりに肩をならべてつきそわれました。
本堂に入りますときに、「御案内」といわれて、段をあが
られて、その板の上にすわって、うつむきふして待たれまし
た。

それ
夫より座二上り候時、是ハ例御存知之通、辞
じようひさしくそうろうて　ようやくたいぎ　あいなり
譲久敷候而、漸對座二相成、ソロソロ言も
ておたがい　げんごにおよび　さかつき
出テ候而御互ニ及言語申候。杯進ミ候而例の
とおりしん　て　けんしゅう　あいすみ
通進シ申候而、献酬も相済候。

のぞき
國老莅戸六郎兵衛　九郎兵衛事改名　ハ、今侯の
もつておなじくこれまで　もちろんぎをととのえ　てれいようしんせつ
命を以同敷是迄郊迎、勿論整儀候而礼容深切
さてするがのかみどのそのほかしようこ　みようだい
二候。扱駿河守殿其外諸公子よりも、名代の使

者皆礼服ニて是迄罷出候。
これまでまかりいで

それから、座敷に入りますときに、これはいつもの、あなたもよく御存知のとおり、へりくだってお譲りになりましたので、譲り合いつつ、やっと向かい合って席に着くことができました。それから、そろそろ会話もはじまりました。さかつきごともすすみまして、いつものようにお酒をすすめられまして、さかつきのやりとりもいたしました。国家老の莅戸六郎兵衛―九郎兵衛を改名しました―は、今の藩主の治広公〔江戸在府中〕の命令によって、藩主の名代として、鷹山公と同じように行列を整えて礼儀正しく、心をこめて迎えてくれました。駿河守殿（上杉勝定公。鷹山公の義弟。重定公の五男）とそのほかの公子からも、名代の使者が、礼服で迎えてくれました。

大老侯ハ其節丹泉ニ入湯ニ付、附の家老一人使
者ニ被差出候。
そのせつあかゆ
さしだされ

今日近傍の村民無老少、田畔ニ伏シテ儀ヲ觀
申候者、嗚呼の聲計にて皆々落涙飲泣能の
聲啾々と聞え候得ハ、侯の徳、民心ニ感戴之
所ハ、是ルテ相知レ申候。於 是愚老なる者、豈
可不泣乎、豈可不泣乎。
きんぼう ろうしようなく たのあぜ
もうしそうもの ああ こえばかり
こえしゅうしゅう そうらえ
みんしん かんたいの
あに
ここにおいて
あいに
なからずけんや

大老侯（鷹山の父で、先々代藩主の重定公）は、そのと
き、赤湯温泉で湯治のため、附家老の一人が迎への使者と
してこられました。

きょうは、近在の村人が、老いも若きもみな田のあぜ
に伏して、このことを見ておりまして、「ああ」という声
のみで、みなみな涙を流し、忍びなく声がしくしくとき
こえてきました。鷹山公の徳が、領民の心にありがたく
おしいただかれていることが、このことによってわかり
ました。いまわたしが、ここにいて、どうして泣かない
ことがありますよう。どうして泣かないことがありますし
よう。

一、御案内可申もうすべしとて老侯発駕、直二引續キ尾志はつが じき ひきつづ びして

府城に入り申候。都城之民満途、老侯の儀衛を拝とじょうのたみみちにみち

観し、並二愚老ヲ見申候而是又嗚呼之聲不斷耳候。みもうし てこれまた ああ のこえみみにたえず

旅館ハ三ノ丸内老侯隠館より三丁計ばかり これありも有之候。

奥山良助と申侍、近比家作ヲ致直し屋敷も手もうすきむらい ちかごろ かさく いたしなお て

廣く家も其調ひ申候宅二御座候。此人願出びろ そのととの もうしそうろうたく このひとねがいいで

候而愚老逗留中之旅館二被抑付度、甚殊勝て とうりゆうちゆうの おおせつけられたく はなはだしゅう

に被存右屋敷ヲ明渡し旅館に被定候。ぞんぜられ さだめられ

一、「御案内」いたしますと、鷹山公が出発されました。すぐ

にひきつづいて城下にはいりました。城下の人びとは、道

に満ちあふれて、鷹山公の行列を拝観し、そのあとに続く、

わたしを見ました、また、「ああ」の聲が耳からはなれませ

んでした。旅館は、三ノ丸内の鷹山公の隠居屋敷から三丁

ほど離れたところでした。

奥山良助という家臣が、最近、家を修築して、屋敷も広

くて、調った家でした。この人が、願い出て、わたしの米

沢滞在中の宿舎としてほしいとのことでした。とても、感

心なことである、ということ、この屋敷が宿舎に定めら

れました。

愚老衰年泉水を好ミ申候段被聞及候而、新すいねんせんすい だんききおよばれそうろうて あらた

二右庭中二泉池ヲ被築、流水潺湲中々をも志ろいずみのいけ きずかれ せんかんなかなか し

く候。但し日々多忙、右庭中へ下り致逍遙候ただ しようよういたしそうろう

事ハ只一度ニて御座候。こと ただ

一、館二至り候前より國老中条豊前、竹俣兵庫そうろうまえ こくろう ぶぜん たけのまたひようご

以下之長有司皆々礼衣嚴然待迎へ候而、慰勞の ちようゆうし れい いげんぜんまちむか そうろうて いろう

無所不至候。諸公館より着之悦之使者いたらぬところなく しようかん ちやくの よろこびの

不斷門候。其夜ハ半ハ甚勞し申候いき。もんをたらず なか はなはだろう もうしそうら

わたしが年をとってから、庭の池を好むようになったことを聞き及ばれて、あたらしくその庭に池を築かれました。さらさらと流れる水がおもしろい池です。ただし、毎日多忙なことで、この庭に降りて散歩できたのは、たった一回だけでした。

一、宿舎に着く前に、国家老の中条豊前、竹俣兵庫以下の役職の者が、全員礼服に身を整えて宿舎でおごそかに迎えてくれました。苦勞をねぎらうことが、すべてに行きわたっておりました。諸役所からも到着の喜びの使者が、あとを絶ちませんでした。その夜は夜中まで、本当に疲れました。

一、翌朝改めて、老侯より使者を以被勞、竝ニ請し
もうされそうらにつき よつどき いんかん まかりいで
被申候 付、四時ニ隱館へ罷出候所、門ニ見次
のものの あいまち はつ あいづ ほう
キ之者兩人相待、愚老旅館ヲ發し申候相図ヲ報し
て いりそうらえ つきの ようにん
申候而、愚老門ニ入候得ハ附之用人兩三人、玄関
しきだい でむか とりつき まちもうし ざしきにいりそうら
式臺ニ出迎ひ、取次ハ下座ニ待申候。入座敷候
え あさかみしも げくう に
得ハ老侯麻上下、外宮三ノ間迄御出迎ルて、御自
ぜんどうこれあり じき に ひんしゅ わ
身前導有之、直ニ奥座之間へ案内ルて賓主ヲ分ケ、
れいのたいざ まずまずわらいなくかたり およ それ
例之對座にて、先々笑泣談ニ及び、夫より料理
いでそうらうて ちそういたらぬところなく あぶりもの ひかれ
出候而、馳走無所不至候、炙は御自身被引
候。

一、翌朝、改めて、鷹山公から使者をもつて、慰勞され、
あわせて、お招きをうけましたので、四ツ時（午前十時）
に隱居屋敷へ出かけましたところ、門のところに見張りの
者が二人おりまして、わたしが宿舎を出ますと、その合図
をしまして、わたしが隱居屋敷の門に入りますと、御附き
の用人二三人が、玄関の式台で出迎え、取次の者は下座で
待ち受けました。座敷に入りますと、鷹山公は麻上下の礼
服で、表の三ノ間まで出迎えられて、御自身で奥の間へ案
内され、招かれた者と招いた者の区分をはっきりとして、
いつものような對座となりました。まずまず、笑い、泣く
はなしとなり、料理も出され、その御馳走はなにひとつか
けるものはありませんでした。あぶり物は、御自身で焼い
てくださいました。

例之通、杯ヲ遣シ申候而、諸有司奔走、ハ
のとおり さかづき つかわ て しよゆうしほんそう や
ツ過迄飲宴、夫より左右ヲ退ケ、精密之言談に及、
すぎ いんえん それ しりぞ のげんだん および
國事共先々荒増質問有之、学談ニ及、今日ハ勞
こくじともまずまずあらまし これあり がくだん およぶ わずらわ
シ可申とて、七ツ比に致退出候。送迎如常、
もうすべし ころ たいしゆつたし つねのごとく
痛入候事共ニ御座候。

歸館後直ニ以使者、仍凡一ツ、蒲席一ツ、
きかんごすぐ ししやをもつて よりてつくえ がまのせき
小杯一ツ被贈候。命ニ御老年之儀、勞疲を甚恐
しょうはい おくられ めい ろうひ はなはだおそ
レ申候間、此凡ニより此席二座し、誰ニ逢
もうしそうろうあいだ このつくえ このせき ぎ だれ あい
候共、必々席ヲ離レ、凡ヲ退ケ等之儀ハ、
そうろうとも かならずかならず つくえ しりぞ など ぎ
決而無御座様二との儀、
けつしてござなきよう

いつものように、お酒を酌み交わしました。諸役人は忙しく走り回り、ハツ過ぎ（午後二時過ぎ）まで酒宴。それから、まわりの者をしりぞけて、二人だけで詳細な話になり、国政についてのおおかたの質問がありまして、学問についての話になりました。「きょうは、御面倒をおかけしました」ということで、七ツころ（午後四時ころ）にしりぞいて、帰りました。その送迎は、いつものとおり御丁寧で、恐縮しました。

宿舎に帰りますと、すぐに、使者がきまして、凡一つ、蒲の葉で編んだ敷物一つ、小さめのさかづき一つが贈り届けられました。その思いは、わたしが老年であることから、疲れることを、大変心配されてのことで、この凡にすわって、誰がたずねてきても、必ず必ず、この凡からはなれたしりぞいたり、決してなさないようにとのこと。

さかづき

これに ころのまま

杯 ハ近年小杯ヲ御好ミの由、是尔て心儘ニ

おもちいそうろうよう

つくえ

かな もうざず

御用 候様ニ、凡ハ高低心ニ叶ひ不申候ハ、

もうしつけるべく

がまに

あらた

やわらか

又々可申付候、蒲席ハ國産之蒲尔て、新ニ柔

おら

おきそうろうよし

ようろう

ころつくさぬところなく

まためい

二織セ置候由、養老之意無所不盡。又命に

このたび

此度御下向ニ付、老臣共初メ皆々日々罷出候、起

きよもうすべく

おいで

けっして

居可申候。先生より御出之儀は決而御無用、此

段兼々老臣共へも申付、其外家臣一統ニ右之段申渡

置候。

さかづきは、近年こぶりのものを好んでおられるとのこ

と、どうぞこのこぶりのさかづきをお使いくださるよう

とのこと。凡は、高さがあわないようでしたら、申しつけ

てくださいとのこと。蒲の敷物は、国産の蒲の葉を使って、

新しく織らせたとのこと。老人をいたわり世話をすること

に、心をつくさないことがらは、なにひとつありません。

また、命令として、このたびのわたしの米沢滞在について

は、老臣どもをはじめとして、皆の者が、日々訪問して生

活をするようにとのこと。わたしから出かけて行くような

ことは、絶対にならないようにとのこと、このことも以前から

老臣どもにも申しつけられ、そのほか、家臣一同にも、こ

れらのことを申し渡されたとのこと。

大老侯の宮、諸公子へも同様、是ハ此方より日限

ヲトし、御請し可申との儀、其内二三老臣も参

り、安否ヲ問ひ、夫より廿年の心事ヲ談し、元来弟

子之儀に候得ハ、無残處愛敬、老侯よりの

被仰渡之通りニ、私宅等へ為挨拶罷出候事ハ、

必々斷ニ及申候由。皆々申聞ニ候。

依之逗留中、三老臣及其餘之大臣より、一統

二日々來問ヲ請ケ候計ルて、愚老ハ一向不参候。

發足前ニ飲宴と申候而、三老へ一夜宛咄しニ

参り、飲ヲ盡し申候。

大老侯の重定公の御屋敷にも、諸公子にも同じように、

この方々には、わたしのほうから、日時を定めて、招きを
受けられるようにとのこと。

そのうちに、二三の老臣もやってきて、安否をたずねあ
い、それから二十年來の思いを語りあった。もともと弟子
なので、新愛と尊敬の念のみです。鷹山公から、わたしが、
私宅へ挨拶のためにでかけることは、一切お断わりにする
と、全員に申し渡された。そのため、滞在中に三家老およ
びそのほかの大臣から、毎日訪問を受けるばかりで、わた
しは、まったく出かけませんでした。米沢を發つ前に、酒
宴といって、三人に老臣のところへ、一晚だけはなしにで
かけまして、喜びをつくしました。

大老侯の宮へも兩日被請候而、參謁、大老侯七十七、

涙ヲ垂レテ御悦二候。盡日馳走無残所候。

三公子 當侯の弟駿河守殿相模殿遠江殿 是も

追々來問、自是ハ不參、立前二一度宛參り馳走二

逢申 候。

一、中條豊前、竹俣兵庫、莅戸六郎兵衛三老ハ、一日

二二度ハ參り候。一度不參日も無之、夜ハ四ツ九

ツ迄、飲宴交歡樂敷事二御座候。其餘新旧相知之

諸有司、諸学生、日々來問、是又同斷樂敷候。

大老侯（重定公）のお屋敷へも、二日間、請われて参上い

たしました。大老侯は七十七歳におなりで、涙を流してお喜びになられました。終日、おもてなしをうけました。

今の藩主の三人の弟君（駿河守殿↓鷹山公の義弟勝定・重定公の五男、相模殿↓鷹山公の義弟勝熙・重定公の長男、遠江殿↓鷹山公の義弟信政・重定公の四男）も、追々お越しくださいました。こちらからは、お訪ねしませんでした。出発前に一度づつお訪ねしまして、おもてなしをうけました。

一、中條豊前、竹俣兵庫、莅戸六郎兵衛の三家老は、一日に二回はやってきました。一回も来ない日はなくて、夜は、四ツ（午後十時）、九ツ（午前零時）までも、酒宴でうちとけて楽しいことでした。そのほか、新旧のしりあいの諸役人、諸学生が、日々やってきてまして、これまた、本当に楽しいことでした。

一、学館へハ着之翌々日、聖堂へ拜謁、諸学生と飲宴交歓致し候。一月二六日、二七ノ日終日罷出、昼前ハ大學ヲ講し、晝後ハ詩文又ハ學事ヲ談し申候。前學生、当學生數十人困饒いじょうい多し悦よろこび申候。

一、藩校興讓館へは、到着の翌々日に聖堂を拜謁し、諸学生と酒宴でうちとけて楽しみました。一月二十六日、二十七日に終日藩校へでかけまして、午前中は、『大学』を講義し、午後は詩文または学問について話しました。以前の学生や現在の学生数十人が、わたしを取り囲みまして、うれしかったです。

右之外ほか二町家ノ者願ねがひ出、兩日講談四百人計ばかり 頭かしら

分計ぶんばかり 町奉行持もちて出申候。不相替あいかわらず皆々落涙たみ疊たみヲ

濕しめし申候。勿論例之通愚老も泣なキ申候もちろんいき。

學館へ出席ノ日ハ老臣諸大臣も不殘出席、學生何レのこらず

も上達、志業風じようたつ しぎようふうヲ成シ、見事之様子ニ御座候而、な みごとのようす

扱々樂敷事二候。上田、菱刈兩生、諸學生と交歡、さてきてたのしきこと

日々悦申候。此段餘あまり長く相成候付、略し申

候。餘ハ御想像可被成候。ほか なさるべく

これらのほかに、町家（商人ら）の者からの願い出によつて、二日間四百人あまり―指導的な立場の人―に講談をしました。町奉行も出席しました。いつもと同じように、みんなが感動の涙を流しましたので、涙でたたみがぬれました。もちろん、わたしも、いつものように、涙をながして、講談をしました。興讓館へ出席の日は、老臣、諸重役も全員出席されました。学生も学問がよく身につき、学業、事業への志に満ちており、その見事なようすは、なんとまあ、楽しいことでした。上田、菱刈の二人は、諸学生と交流して、毎日喜んでおりました。これらのことにつきましては、語れば、あまりに長くなってしまいますので、略します。いろいろ、御想像ください。

一、老侯之宮へハ毎日晝過ひるすぎより参上 仕、夜ハ

早キ可五ツ遅キハ四ツ過二歸館致候。時々三老も

交り、何是例之國事に及申候。老侯朝四ツ時よ

り昼過迄ハ大老侯伺ひ二御出、一日も怠り無候、

其間四丁程有之候。日々之伺ひ陰晴風雨疾風迅

雷、決而不參無之候。扱も扱も至孝の性萬民感戴

先ツ是可第一ノ君徳二御座候。大老侯も一日も老侯

を不被見候得者不樂候。

一、鷹山公のお屋敷へは、毎日昼過ぎに訪問し、夜は早い時

で五ツ（午後八時）、遅い時は四ツ（午後十時）過ぎに、歸りました。ときどき、三家老も同席して、あれこれ国政に

ついて話しました。鷹山公は、朝四ツ（午前十時）より、

昼過ぎまで、大老侯（父親の重定公）のところへ出かけられまして、一日も怠ることはありません。その間は、四丁

（およそ四百メートル）ほどです。毎日の訪問は、曇りも

晴れも、風でも雨でも、激しい風と激しい雷の急な変化のときも、決して取りやめることはありません。まったく、

このうえもない孝行で、すべての人がありがたく、おいしいただき、なによりも、これが第一の君主としてのすぐれた人柄でございます。大老侯（重定公）も、一日でも鷹山公と会わなければ、楽しくないことです。

これによりて

どうだん こうしんかんぶくいたしそうろう

仍之諸公子も同斷、孝心感服致候。老侯宮

こうじもうし

つ のゆうしいつとう

ニテハ日々孝経を講申候。附キ之有司一統

もうすにおよばず

さんかいこうをきかれ

不及申、三公子も日々参会被聞講候。

なかんづくかんしん

は

就中感心之儀者、当主之養子世子宮松殿、今年八

はなはだれいり

歳、甚伶俐二御座候。老侯宮中ニテ成育有之候。

ききようせいげんげんこうこう まった

とくど

けんぶんこれあり

起居動靜言々行々、全く老侯の徳度ヲ見聞有之、

ほか ありがたきひと

これなき

ぞんぜられそうろうよし

御祖父様より外二難有人ハ無之と被存候由

に

は おどろきいり

きかれそうらえどもけん

尔て、いや者や驚入候。日々講ヲ被聴候得共倦

たい ようしよく

これなく

怠之容色一ツも無之候。

このようなわけで、諸公子も同じように訪問されており、孝行な心に感心いたします。

鷹山公の御屋敷では、毎日『孝経』を講義しました。御付きの役人一同はいうにおよばず、三公子も毎日参加されて、講義を受けられました。とりわけ感心した方は、藩主の養子で世子の宮松殿〔鷹山公の義弟勝熙公の子で藩主治広公の養子〕です。今年八歳で、たいへん利発な子です。鷹山公のところで、育てられています。立ち居振る舞いのようす、言うこと為すことすべて鷹山公の品性を、見聞きして、この鷹山おじいさまよりほかには、尊い人はないと思っておられるようで、いやはや、驚きました。毎日講義を聞かれても、飽きたというようなお顔は一切されません。

御祖父様同様どうようニ其位そのくらいニ座し、威儀容度儼然いぎようどげんぜん可見みえ
事ことニ御座候。

老侯之愛育きようかい教誨もちろんハ勿論、天性不及てんせいもうす申候。直丸殿
御事おんことヲ内心ないしんニ存出ぞんじだし含涙がんるい候そうらひ起き。御遠察可被成ごえんさつならるべく
候。老侯の徳ハとても筆紙ひつしニ不盡つきず候。仍之略これによりてりやくし
申候。
もうしそろう

鷹山おじいさまと同じところに座られ、立ち居振る舞い、
顔つきがおごそかで、見どころのある方でございます。

鷹山公の教えはもちろん、天性のものであることはいう
までもありません。直丸殿（鷹山公の幼名）を教えている
ときのことを思い出し、涙ぐみました。御推察ください。
鷹山公の徳は、とても書き尽くすことはできません。この
ようなわけで、略します。

一、領内之美事不遑枚舉候、孝悌力田風ヲ成し、

有司ハ安然として慰勞スルノミニ御座候。此儀は、

上田菱刈見聞泣キ申候計ニ御座候。生育の世

話も行届キ、今ハ一民も子ヲ不育者無之候。不思議

之事ニ候。歸府之上、市谷ニて此事ヲ申述候得ハ、

是計ルても明君なり、大功哉大功哉と称美被致

候。甚三郎も嘸嬉敷存し候ひつらんと悦被申

候。

一、領内のほめるべきことは、あまりに多すぎて数えあげる

ことができません。父母に孝行で、目上の人によくしたが

い、農業に力をつくす風潮ができあがり、役人は、やすら

かにして、苦勞をねぎらうだけでございます。このようす

は、上田、菱刈も見聞きして、泣きそうになっておりまし

た。子育ての世話も行き届いておりまして、今では、食べ

ることができないことから子育てができないという者は誰

もおりません。不思議なことです。江戸へ帰りましてから、

尾張藩主にこのことを申しあげましたら、「そのことだけ

でも賢明な君主だ。大きな功績だ、大きな功績だ」と、ほ

めたたえられました。「甚三郎（平洲の通称）も、さぞかし

うれしいことであろう」と、喜び申されました。

一、泉氏之婦病歿之儀、早速早便ニテ被告候。愚いずみし よめびようぼつ、老ハとても覚悟、已ニ八月末ニハ参り候而、永訣かくご すでい多し候得ハ、別而痛心も不致候。乍併老候た そうらえ わけてつうしん いたさずヲ初、老臣以下一統之悲哀ニテ、扱々却而哀はじめを添へ申候いき、老侯は赴ヲ被聞候と、直にこつきゅう哭泣、先生之心中如何計と能ミ被申候而、左これ はなはだうれ右從臣も是を甚愁へ申候。別而竹侯、莅戸両まい ちよう そうろうて人ハ参り吊シ候而、愚老よりハ甚之落涙、其ほか しんこうしよしもちろん餘の深交諸子勿論、いや者や迷惑い多し候。は た

一、泉氏（嚶鳴館の門人で塾長も務めた）の嫁（平洲の娘、みほ）が病気で亡くなったことについては、さっそく、早便で知らせが届きました。わたしは、覚悟をしております、すでに八月末に見舞いにいきまして、永遠の別れをいたしましたので、特に心を痛め悩ますことはありませんでした。しかしながら、鷹山公をはじめ、老臣以下一同の悲しみとあわれみに、かえって、悲しみを増しました。鷹山公は、知らせを聞かれたとたん、大声をあげて泣かれ、「先生の心中はどれほどか」とだけ申されまして、御傍近くに仕える家臣も、とても心配をされました。ことさら、竹侯、莅戸の二人は、やってきて悔やみを述べられ、わたしよりはなはなだしく涙を流され、そのほかの深い交わりのある方々も同様で、いやはや、どうしたらいいかとまどいました。

これによりて　すぎきあけ　つき　しいて　ちよう　もうしそろう
仍之三日過忌明二付、強而老候二朝し申　候
ところ　またまた　ひ　あいはなはだしく　これ　たびたび　ごえんさつ
所、又々悲哀甚敷、是二ハ度々迷惑御遠察
くださるべく　かえって　ぐろうふにんじよう　てい　あいみえもうすべき
可被下候。却而愚老不人情之態二も相見可申
や　ま　しかしながらこのばに　すこ　いた　そうらえ
哉とこ満り申候。乍併此場尔て少しも痛ミ候得
ば　うれい　しょう　そうろうにつき　じつ　は
者、一藩中之愁ヲ生し候　付、実ハ齒ヲくひし
ば　いたさず　じよう　せつきくにみえそうろう
者り、落涙ハ不致候。情ハ見拙作　候。

このため、三日過ぎた忌明けに、あえて鷹山公にお会いし
まして、御報告を申し上げましたところ、またまた、とて
も悲しく哀れに思われて、これには、本当に、どうした
らいいのかとまどいました。御推察ください。かえって、
わたしに思いやりがないよう受け取られたのではないか
と、困りました。しかしながら、ここでわたしが、少しで
も悲しむと、一国中に悲しい思いをさせてしまうので、実
は、齒をくいしばって、涙をながさないようにしたのです。
情のないことに見えたことでしよう。

一、三老を初諸有司之輯睦、見事成事不及申候。
はじめ しゅうばく みごとなることもうすにおよばず
これに せいじ ゆきとど もうすこと ぞんじ のぞきたいふはなはだ
是ルて政事も行届キ申事と存候。莅大夫甚
げきしよく ぶんが はいせずおもしろ あいみ もうし ちく
劇職中、文雅ヲ不麁面白く相見へ申候。竹大夫
もちろん
勿論中條も俗人ニあら須。常々面白く咄合申候。
じんば あ けんたい はなしあい
神保学問ヲ上ケ申候。督学、用人ヲ兼帯政談も多
このひと けつ ぶんしよく てん ぐんぶ
く此人ニ決し申候。片山紀兵衛文職ヲ転じ郡奉
ぎよう あいなり に ようむのしよく
行ニ相成候。米澤ルてハ要務之職ニ御座候。

一、中条、竹俣、莅戸の三家老をはじめ、諸役人がやわらぎ
おつまじくしているのは、実に見事なものであることはい
うまでもありません。これによって、政治も行き届いてい
るのだとおもいます。莅戸家老は、非常に忙しい職務です
が、そんななかでも、詩文を作ったりすることをやめず、
快く楽しく見えます。竹俣家老もちろん、中条も、世俗
の人ではありません。いつも、快く楽しく話し合っていま
す。神保督学も学問を向上させております。興讓館督学（校
長）と用人（藩主のそばに仕える役人）を兼ねておりまし
て、政治のことも、多くをこの人が決めております。片山
紀兵衛は、学芸関係の職からはなれて、郡奉行になりました。
米沢藩では重要な職務です。

御預り所之人民難取扱諸国一般二候所、此人郡このひとぐん
奉行二相成候得ハ、志川て早縄も入用二無之、
民心甚和ギ申候。人ヲ被用候事不堪感心
候。

一、五十二日逗留、雪も降り申候付、是非二斷り

十月廿八日米澤ヲ發し申候。當日老侯、駿河守殿、
莅大夫ハ當主の命を以、又羽黒堂迄如前、

郊送之儀衛儼然、新旧相知一統二送り申候而、一

里餘南郊羽黒堂ルて別レ申候。老侯ヲ初一統之

落涙御遠察可被成候。

担当するところの領民の取り扱いがむづかしいことは、ど
の国でも同じですが、この人が郡奉行になりましたからは、
民の心情もやわらぎました。適材適所の人事に感心します。

一、五十二日間滞在して、雪も降り始めましたので、どうし
ても帰りますとお断りして、十月二十八日に米沢を發ちま
した。当日は、鷹山公、上杉勝定駿河守殿、莅戸家老は藩
主の命を受けて、また羽黒堂まで、迎えるのときと同じよう
に、儀仗兵の行列を整えて、それから新旧の知り合いのみ
なさんが送りに来てくれました。お城から一里ほど（およ
そ四キロ）南の郊外、羽黒堂にてお別れしました。鷹山公
はじめ、一同涙を流しての別れでした。御推察ください。

じんぼ 神保ハ送りの役人ヲ引連レ、命を以板谷関迄送り

べつり てい べつり 申候。別離の態、御想像可被成候。

もはやさいゆう これなきち やませんりようらく さこんごんごどう 生涯最早再遊ハ無之地、山川遼落、鎖魂言語同

だんに 断御座候。

さくらだ 十一月九日東都二着キ申候。櫻田より迎使、

せんじゆまでまかりいで いちがいしようかん たいふ なかしよし まち 千住迄罷出、一崖小館へハ大夫、中庶子兩人待

おり ていねいもうすにおよばず しまいりようこう 居申候。丁寧不及申候。僕も生涯の仕舞旅行、

ともまわ ひかせ 供廻りも本格の通りにて、馬も為引申候。少々俗吏

てい か ござそうろう の態ハを可しく御座候。

神保督学は、送りの役人を引き連れて、命令を受けて板谷関まで送ってくれました。この別れを、御想像ください。

生涯もうふたたび訪れることのない米沢。山や川は輝きを失ってしまい、魂はとぎされてしまい、ことばでは言いつくすことができません。

十一月九日に江戸に着きました。桜田（上杉家の上屋敷）からは、迎えの使者が千住まで来ておりました。一崖（市谷）の家には、江戸家老と中庶子の二人が待ち受けておりました。御丁寧なこと、いうまでもありません。僕も生涯の仕舞旅行。旅の供廻りも本格のとおりで、馬も引き連れたのものでした。ちょっと、役人のようで、おかしかったです。

一、九日夜二入り帰着二付、翌朝市谷第二朝し申候。いちがやてい ちょう

くんじょう さつそく

めしだされそうろうてゆるゆるいろ

君上も早速奥座へ被召出候而寛々慰勞、米沢

あいなり

いっときばかりはな

きかれそうろうて

きしよく

物語二相成、一時計咄しヲ被聞候而、喜色

おおかたならず

しよろうしんようざ

不大方候。退出之時、諸老臣用座へ呼出し、又々

ながものがた

あいなり

や

すぎてい

きんべん

同様ニて長物語り二相成、ハツ過第を出て、近邊

かんちょうかいきん

た

くれ

きたくいたし

もんじんぐんしゅう

官長廻勤い多し、暮ニ致帰宅候。門人群集ハツ

ころ

はな

もうしそうろう

比まで咄し申候。

一、九日の夜に到着しましたので、翌日に尾張侯のお屋敷に

参上しました。藩主の宗睦公も、さつそく奥座へ召されま

して、ゆったりと苦勞をねぎらってください、米沢の物語

いっとき

になりました。一時（二時間）ばかり、話をお聞きになら

れまして、たいへんお喜びのごようすでした。退くときに、

諸老臣から執務部屋へ呼ばれまして、またまた長話になり

まして、ハツ（午後二時）過ぎに、御屋敷を出まして、そ

れから、近辺の役所の長官のところへ報告にまわりまして、

暮れに帰宅しました。門人が群れ集まってきておりハツ（午

前二時）ころまで、話をしました。

翌十一日朝、山田平次罷越、今日ハ當主御礼ニ

市谷へ参上の序直ニ、高館へ被参筈と申聞

候付、大キニ取込候而、彼是掃除申付候

内ニ、儀衛儼然、米澤侯麻衣裳駕籠側ハ麻上下、

ドロドロと御入来ニ候。

直ニ奥ノ小座敷へ請し申候。中々賓座尔ハ就

間敷、愚老客座ニ就キ候様ニと、例之恭遜辞

讓時ヲ移し甚こ満り申所、中庶士須田多

仲、却而先生ヲ勞し候事、如何御座候と

申述候付、漸對座へ御上り有之候。

翌日の十日の朝。上杉家の山田平次がやってきまして、

今日は、当主の治広公が市谷の尾張藩へ参上するついでに、こちらへもこられるはずだと伝えてきましたので、大騒動になって、あれこれ掃除を申しつけているうちに、行列をおごそかに整え、藩主の治広公は正装の麻衣裳、駕籠そばの者は麻上下の礼服用で、ドロドロとお越しになりました。

すぐに、奥の小座敷に案内しました。なかなか客座につかれず、わたしに客座につくようにいわれ、いつものように、慎み深くへりくだって譲られまして、譲り合いの時だけがすぎまして、困っておりますときに、中庶子の須田多仲が、「かえって、先生を困らせますので、お席に着かれては、いかがでしょうか」と、申し述べましたので、ようやく席に着かれました。

このたび おんごく
此度先生ヲ遠国へ招待之御礼、市谷へ今日申上
したがってすぐ まかりいで
候。随而直二罷出、御礼申上候との儀、辞謝反
ぶく ていねいたみいり 覆、丁寧痛入候。銀綿端匹酒肴、表座敷へ備へ、
ざんめんたんひつしゅこう 座二満千申候。其内二家ノ鍛工へ被申付、刀
そのうち いえ たんこう もうしつけられ かたな
脇指二口ヲ新二被為鑄候而、持参二御座候。目錄
わきざし くち あらた いなされ て じさん もくろく
は米沢侯御自身二被相渡候。是ハ先例越侯浜町
おいで れい とお へ御出の礼之通り二御座候。妻子嫁迄被召出、
ねんごろ いろう おのおのたまものこれあり 懇二慰勞、各賜物有之候。塾長召出シ、
じゅくちようめしだい 目錄ヲ給り候。
もくろく たまわ

「このたび、先生を遠い米沢まで招待することのできたお礼を、今日市谷の尾張侯に申しあげました。それで、すぐこちらへまいりまして、お礼にまいりました」とのこと。辞退を何度も繰り返され、恐縮に存じました。粗末な酒のつまみを表座敷に整えて、座に着きました。そのうち、上杉家の刀鍛冶に申しつけられて刀脇差の二振を、新しく作られて、それを持参されました。その目錄は治広公御自身が、手渡されました。これは、先年、越前守（鷹山公）が浜町の嚶鳴館へお越しになったときの礼と同じでございます。妻子と嫁まで呼び出されて、心を込めて、苦勞をねぎらわれ、それぞれ品物をいただきました。塾長を召し出され、目錄をいただきました。

ずいじゅうりようせい
随従 両生 上田菱刈 も召出し謝辞有之候。
たまもの
賜物ハ米澤尔て有之候。

なに きよう もうさず すいもの
何も供シ不申、吸物一ツ、御酒肴計尔て盃
れい とおりしん あいすみ それ はなはだえつきに さかづき

すぎまでものがたりこれあり
ヲ例之通進シ相済候。夫より甚悦喜尔て七ツ
過迄物語有之、御帰リ有之候。愚老ハ玄関式臺
に たつてじしゃ はい が に めされ

そうろうよう もうしそうらえども
尔て達而辞謝ニ付、入り申候。駕ハ門中尔て被召
候様ニと申候得共、承知無之、漸門の内
せがれ こ てじようよ

これあり
シキミノホトリニテ、忤無理ニ請ひ候而上輿
有之候。礼ニハ決而不參様ニ、急度御申聞ニ
よんどころなく てさくらだ まい じんじつこうかん

いんえんまかりかえ
付、無據十四日二初而櫻田へ参り、盡日交歓
飲宴罷歸り候。

随行したふたりの学生―上田、菱刈―も召し出され、感謝を述べられました。彼らは、お礼の品物を米沢でいただいております。

なにもお出しするものもなく、吸い物ひとつと酒のつまみだけで、さかづきを、いつものように交わしました。

それから、はなはだお喜びになり、七ツ（午後四時）過ぎまで物語り、お帰りになりました。わたしは、玄関の式台でお送りをしました。お駕籠は、門の中で召されるようにと申しあげたのですが、承知をされず、ようやく門の敷居のところで、せがれ（平作）が無理にお願いをして、駕籠にのっていただきました。返礼には、決して来ないようにと申し聞かされたので、やむを得ず、十四日にはじめて桜田の上屋敷へ行きまして、終日、交歓、酒宴をして帰りました。

いちがやていちゆう　もうすにおよばず　りんり　かくしやく　た
市谷邸中ハ不及申、隣里を赫灼い多し、きのとくなる事ニ御座候。

山村伊勢守よりハ、家来ヲ遣し、急成事ニ候
え　ふ　つ　ごう　これあるべくそうろうあいだ　なにに　て　つだい
得ハ不都合ニ可有之候間、何尔ても手傳
もうすべきよし　もうしきかせ
可申由ヲ申聞候。

一統珍敷可り申二付、世の儒教の季世ニ及
もうす　たん　あるまじきこと　これなく　すで　はまちよう
申ヲ歎し申候。有間敷事ニも無之候。己ニ濱町
ごや　ふ　ごう　おいでに　これありそうら　ただ
小屋へも父侯ハ御出ルて有之候イキ。但し當侯
つがれそうろうこと　かんぶく　た　そうろう
志ヲ被継候事ハ感服い多し候。

市谷の藩邸内は言うに及ばず、近所も光輝かせてしまい、迷惑をかけて申し訳なく存じます。

山村伊勢守（尾張藩邸内の平洲邸の隣家）からは、家来を派遣してくださり、急なことであり、不都合なことがあれば、なんでもお手伝いをしますと言ってきてくださいました。

全体がめずらしかって、世の中の儒教の末期になったのではないかと、嘆いております。ないことではありません。すでに浜町の家には、父上の鷹山公がやってこられたことがあります。ただし、今の藩主の治広公が、その志を継がれたことには、深く関心致しました。

一、上田菱刈二生ハ仕合者ニ御座候。米澤にても客きやく

遇ぐうていねい丁寧なる事ニ候。老侯宮中へ被召出目見有之、

丁寧ニ慰勞有之料理ヲ給り目錄も玉り候。十日

の暇ヲ与へ奥の松島へ遊覽為致候。然所、米澤

ヲ離れ他領へ罷越候事、道中無心元由尔

て、僕壺人給り、馬一匹ヲ被供候而、御馳走尔

松嶋ヲ見て帰り申候。此段ハ二生生涯ニハならぬ

遊賞、東都館中之門人とも、甚ねたまし可り涎

ヲ流し申候。

以上

一、上田、菱刈の学生は、幸せ者です。米沢でも客待遇のて

いねいなことででした。鷹山公の屋敷にも招かれまして、

お目見えをいたしましたして、ていねいに苦勞をねぎらわれ、

料理もいただき、目錄もいただきました。十日の暇をあた

えられて、奥州の松島へも遊覽させていただきました。そ

れについては、米沢領を離れて他領へ出かけるにあたって、

その道中が気がかりだからということで、下僕ひとりを付

けられ、さらに馬一匹もそえられて、走り回って松島見物

をしてきました。このことは、ふたりにとって、生涯にで

あうことのないことであり、江戸の嚶鳴館の門人らが、と

てもねたましく思って、よだれをながしておりますた。

以上。

このたび きたゆき 此度の北行、前後之次第、記録シ置可申と存 おきもうすべし ぞんじ
そうろうところ ちやくごこと りよう て 候處、着後事ヲ了シ候而、散々風邪、十七 きんざんのかぜ
へいが 八日平臥、ソリヤコソ旅疲など醫師どもさき王き申 たびづかれ いし わ
候得共、何之苦もなく解熱、ソレヨリ漸々快復、飲 ぜんぜんかいふく
つね ふく このせつ ぜんじん あいなり 食常ニ復シ、此節ハ全人ニ相成、年始も元朝 曉 がんちようあかつき
しゅつし しょうまわりづとめ おおかた き すま セツより出仕、諸方廻勤も大方昨日切りニ濟し なざるべく
もうしそうろうて はこのしょ したた 申候而、今日盤此書ヲ認メ申候。御安心可被下 あいなるべきや
候。今年之御出府も無心元、又明年ニも可相成哉。 このころもとなく
さてさておいごころ これの うれ 扱々老心ハ是能ミ愁ヘ申候。世儀々々忍心哉 せいぎせいぎしのぶごころかな
さいしども つねづねもうしくれ と妻子共と、常々申暮候。

このたびの米沢行は、前後のことを記録しておこうと思
っておりましてのですが、帰りました後始末をしましたあ
と、ひどいかぜをひきまして、十七八日間床に伏しており
ました。「ぞりやくそく、旅の疲れ」などと、医師どもがさわ
いでおりましたが、なんの苦も無く熱が下がりまして、そ
れからすこしづつ回復しました。飲食も普通になり、今は
完治しました。年始も元旦のあけがたセツ（午前四時）か
ら勤めに出かけまして、諸家への勤めも、ほとんど昨日ま
では済ませまして、きょうは、この手紙を認めておりま
す。御安心ください。あなたの今年の御出府も待ち遠しい
のですが、また来年になってしまうのでしょうか。さてさ
て、老人の心としては、このことだけが気がかりです。世
儀（樺島石梁のあざな）、世儀とじつところえる心かなと、
妻子どもと、いつも話しております。

めんご か
面語二代へテ此書ヲ認メ申候。書牘ニ可致と存
づきそらら ども めんどう そっ かばかりいっけん
付候へ共、ソレモ面当、足下許一見アレバス
ぞくしよ もうしつかわし ひろ たけん ごむよう
ム事と、俗書ニテ申 遣候。廣く他見は御無用、
ごこうご ごかってしだい ごぎそらう
御口語ハ御勝手次第第二御座候。

面談することができないので、この手紙を認めました。
漢文にすべきと気づきましたが、それも面倒だし、あな
ただけが読んでくれれば済むことと、和文にしました。
他の方にお見せになることは無用。お話しなさることは、
お好きにしてください。

一、泉も甚よ王り申候得共、諸侯家礼遇甚
いずみ はなはだ わ もうしそうらえども しよこうけれいぐうはなはだ
厚く、去年忌明後日々他行、娘にこ満り申候。妻
あつ きあけごひび たこう ま つま
折々参り致看顧候。好婦も有之様二相聞へ申候。
おりおりまい かんこいたし こうふ これあるよう あいきこ
春の内二ハ継絃の積り二御座候。扱々老人是二は
けいげん つも さてさて
氣ヲ痛メ申候。妻儀愚老同様二足下の東行を相待
き いた つまぎ どうよう そつか どうこう あいまち
申候。春寒御自愛、令女育成之御手当可被成
もうしそろう しゅんかんごじあい れいじよ おてあてなさるべく
候。遣度物も有之候得共、扱々遠国、便りも
つかわしたきもの これありそうらえども さてさておんこく たよ
不自由不任心底候。令内へも宜御申述可
ふじゆうしんそこまかせずそろう れいない よろしくおもうしのべ
被下候。

一、泉（嚶鳴館の門人で、平洲の娘婿）も、たいへん弱って
おりますが、諸侯家から講師として、礼をつくして厚くも
てなされておりました、去年、忌明け後は、毎日出かけて
おりまして、残された娘に困っております。わたしの妻が、
おりおり出かけまして世話をしております。好き婦人もあ
るように聞いております。この春のうちには、後添えを迎
えるつもりでございます。さてさて、老人としては、この
ことに心を痛めました。妻もわたし同様に、あなたが江戸
に来られるのを待ち望んでおります。春寒、御自愛を。娘
さんの成長に心をつくされますように。差し上げたい物も
ありますが、遠く離れたところで、便りも思うままにする
ことができません。奥様にもよろしくお伝えください。

一、巴太仲まかりい罷出でずいしん隨身こうしよせい、好書生ごぎ二御座そうろう候。御安心ごあんしん
くださるべくくそうろう　なになごともごこうびん　そうそうそうごしゆくししもうしおさめ
可被下そ候。何事なんじ茂後便もうごと草々そうそう御祝詞ごしゆくし申納
候。頓首とんしゆ。

正月四日

紀徳民きののりたみ

世儀せいぎ樺賢かけん契ちぎる

梧右ごゆう

猶々なおなお米澤ほとくがくにて保督学つねづねとは常々お御噂わさ、保生ほせいも西望せいぼう
い多した候。已上いじよう。

一、巴太仲（徳山藩儒官）が江戸へ出てきまして、嚶鳴館で
学んでおります。好学生です。御安心くださいますように。
なになごとも、後便にてと、早々にお祝いの言葉を申し納め
ます。

頓首。

正月四日

紀徳民

樺島世儀（石梁）賢に契る

梧右

追伸　米沢で藩校興讓館の神保督学といつもあなたの噂
をしていました。神保君も西を望んでいましたよ（樺島
世儀は築後国久留米藩士）。已上。

跋ばつ

こくどく

閑之上耶。

神行簡拜

ければ、ここに録し出すになむ

附錄跋文【書き下し文】

文化十五戊寅清明前一日 七十六翁

じんぎょうかんはい

るばるといつしかハしければ、ここに録し出すになむ

附録 あとがき

亡き細井平洲先生の手紙へのあとがき

平洲先生の学徳の素晴らしいことについて、世の中にはまだ知られている事と知られていない事がある。

わが上杉鷹山公は先生を千里の道ほど遠く離れた江戸よりお迎えすること三度、ひたすら努力して、ただその礼を欠くことがないかを恐れていた。その上に我が米沢藩といえは、

一つも見るべきものがなく、いやしいばかりであるのに、うわべだけの名声を立派な方や才徳のある人々にほしいままにしている。恥ずかしさをどうしてこらえることができようか。

そうであっても、平洲先生はわが鷹山公に親しまれていたのだから、またどうして普通の旅行者の常の訪問であったと言

えるであろうか。年月の過ぎ去ること、二十年あまり、ずいぶんと久しくなってしまった。先生は以前に言っていたことがある。樺世儀は私を助ける者である、と。真実であった、その言葉は。この一卷の手紙をじっと手に取って読めば、一字読むごとに一筋の涙が流れ、読む人の心を揺さぶって、過ぎ去った日々を思い出させる。先生がこのことを知ったならば、またはてしない空の上で喜んで笑ったり、涙を流して泣いたりすることであろう。

文化十五年戊寅（元年・一八一八）清明（三月上旬）前一日

七十六翁 じん じんぼ ぎょうかん つなただ
神（神保） 行簡（綱忠） 拜

この手紙は、この度遺草に集録されるところのことを聞き及んで、樺島世儀（石梁）が編集してはるばると写して送ってきたので、ここに書き記すものである。

跋ばつ

君子平洲先生国字遺書、存篋笥者若干卷所応于諸侯
及諸子需者十居七八焉、辞世已久矣、人或借去、間
有散逸、余每憂之、会旧門生来集、語次及之、僉曰、
隻字拱壁、不可不重、仮令借者愛護、亦恐転写之誤、
胎瑕於夫子、不可知也、私刊而眎之何如、余甚然之
於是、有斯拳匪敢公諸世也

天保乙未歲仲春

男 徳昌謹識

門人西條 上田節書

跋【書き下し文】

せんくんし へいしゅうせんせいこくじいしよ たんす あ ものじゃつかんかん しょうこう
先君子、平洲先生国字遺書、篋笥に在る者若干卷、諸侯
および諸子需に應ずる所の者十に居ること七八。世を辞して
すで ひさ ひとある か さ ま さんいつ あ よ
已に久しきや、人或ひは借りて去り、間ま散逸する有り。余
つね これ うれ たま きゅうもんせい き つど ごじこれ およ
毎に之を憂ふ。会たま旧門生来たり集ひて、語次之に及ぶ。
せん いわ せきじきやうへき かさ べ たといしやあいいご
僉に曰く、隻字拱壁を重ねざる可からず。仮令借者愛護す
るといへども、亦転写の誤りを恐る。瑕を夫子に貽すは、
し べ またてんしや あやま おそ きず ふうし のこ
知る可からざるなり。私刊して之を眎すること何如、と。余甚
これ しか ここ お こ きよあ あ これ よ
だ之を然りとす。是に於ひて斯の拳有るは、敢へて諸を世に
おおやけ あら
公にするに匪ざるなり。

てんほうおつ みさいちゅうしゅん だんとくしょうつつ
天保乙未歲仲春 男徳昌謹しんで識す

もんじんさいじょう うえだせつしよ
門人西條 上田節書す

跋（あとがき）

亡くなられた父、平洲先生の和文の書き残されたものが、
筆^{たんす}筭にいくつかあった。諸侯や門下生に答えたものが、十の
うち七八を占めていた。先生が世を去ってすでに久しく、借
りたまま去って行ってしまった人もいて、その間に散逸して
しまうものがあつた。私はいつもこのことを思い悩んでいた。
たまたま古い門人が来て集まった時、話のついでに、その
ことに及んだ。皆が口々に言った。文字が欠けたり玉を抱え
込んだりする（本を持ち出して抱え込む）ようなことを、も
うさせてはいけない。たとえ借りた者が、大切に護^{まも}ったとし
ても、また書き写して誤りが生じることが恐ろしい。先生に
瑕^{きず}がついてしまうのを知らんぷりなどできない。あなたが個
人的に出版したら良いのではないか、等々。

わたしはこれらをもつともな事だと思った。そこでこのよ
うな事（『嚶鳴館遺草』の出版）を企てたが、これはおやみに
平洲先生の国字遺書を世の中に公にしようとするものではな
いのである。

天保六年（一八三五）春半ば（仲春・二月）

息子徳昌^{とくしょう} 謹^{しる}んで識^{しる}す

門人西條^{もんじんさいじょう}（藩士^{はんし}） 上田節^{うえだせつ}（雄次郎^{ゆうじろう}・子成^{しせい}） 書きしるす

細井徳昌（二七八七〜一八四五）は平洲養子、本姓宇野氏。字世克、
号中台、俗称清三郎など。